

6月5日（水）授業研究・研究協議会

1 はじめに

広島大学大学院教育学研究科 宮里 智恵 教授を講師としてお迎えし、3年1組で道徳科の授業研究会を行いました。宮里教授には、道徳科の指導と評価についてご指導いただき、今後の授業づくりのポイントをご示唆いただきました。また、今回は、『道徳教育改善・充実』総合対策事業』推進校としての授業提案も兼ねており、海田町教育委員会の指導主事、海田中学校区の校長先生、海田町の各小中学校の道徳教育推進教師、海田東小学校の多くの教職員の方々をお迎えしての授業研究・研究協議会でした。さらに、本校においては今年度初めての全体研修の場であり、家庭や地域と一体となった体験活動との関連を図った「道徳学習プログラム」の工夫と、本年度特に研修を進めていく、「児童の多面的・多発的な思考と価値観への気付きを促すための道徳科の発問の工夫」について協議する場となりました。

2 研究授業

- (1) 道徳科 主題名：感謝の気持ちをもって【内容項目 B 感謝】
教材名：「大通りのサクラなみ木」（東京書籍）
- (2) 授業者 第3学年1組 担任 中坪 清美 教諭
生徒指導主事 宇多 弘典 教諭
- (3) 本時のねらい

自分の生活が、間接的にも様々に、多くの人々によって支えられていることに気付き、そうした人々を尊敬し、感謝する心情を育てる。



3 研究協議会

協議の柱1： 家庭や地域と一体となった体験活動との関連を図った「道徳学習プログラム」の工夫は、どうだったか。

協議の柱2： 児童の多面的・多角的な思考と価値観への気付きを促すための教師の発問の工夫はどうだったか。

(1) グループ協議会

上記の協議の柱をもとに、グループ協議で出された主な意見を紹介します。短時間でしたが、活発に意見が出されました。

- 導入で、今日考えたいことを児童から出していたところが素晴らしい。
- 感謝の対象が直接的から間接的な人物へと、児童の考えを広げるような構造的な板書でよかった。
- 他教科の学習を児童がつなげて考えていた。
- D 批判的な発問「直接何かをしてくれたわけではない相手に『ありがとう』と思うだろうか。」は、児童の考えを揺さぶり、ねらいに迫ることができた。
- 役割演技で、C 投影的な発問「もし、この時ばったり大西さんにサクラの前で会ったとしたら、自分だったら大西さんに何をいうか。」は、直接何かをしてくれたわけでもない人物に対して、感謝の

気持ちを児童から引き出すよい発問であった。

- アンケートの活用が授業の中盤であったが、ねらいに気付かせるために有効であった。
- 役割演技で、一人の児童をクラスのみんなが応援しながら行ったが、やっている人を静かに見て、「自分ならこう言う。」「こんな気持ちでは」と内省する場にしてもよかった。また、3人ぐらいにそれぞれ役割演技させるパターンもあったのではないかな。
- 児童の価値の高まりをどのように見える化するか、あったかタイムの視点を絞ってもよかったのではないかな。

(2) 指導講話

たくさんご指導いただいた中から、主なものを抜粋しております。

- 主題、教材、児童の実態解釈が、教師のものになっているか。→ぶれない授業につながる。

本教材は、主人公の葛藤やハッとする気付きがなく、工夫がいる教材であった。例えば、中坪教諭は、アンケートを授業の中盤で用い、児童の感謝の対象の広がり

が、授業の前と受けた後の変容が分かるように工夫している。中坪教諭が、何をねらっているのか分かっているからできた。

- テンポがよく、45分間の授業で、意見交流、役割演技、3人組でのトーク、書く活動と多様な学習形態で、児童がそれに対応できており、日頃からよく鍛えられている。
- 批判的な質問「大変ならやめればいいのに。」「直接的に何かしてもらっていないのに、どうしてありがとうというの？」などの揺さぶり発問から、「地域」「みんなのために」などのワードがでてきた。道徳学習プログラムが生きている。また、教師が焦点化させ、児童の発言を価値付けたことで児童の思考がねらいに向きやすくなった。
- 中心発問では、D 批判的な発問で、教師の考えを批判させ、揺さぶりをかけてねらいに迫らせた後アンケートに立ち返らせ、「自分に直接『～してくれる。』だったのが、間接的なことでも『ありがとう。』と気付いたことが分かったね。」「アンケートと今回、何が変わった？」と聞き、「直接じゃなく、間接的でも感謝したいことがあると分かった。」と児童にまとめを考えさせる方法もある。
- あったかタイムでは、今回の授業では、道徳性そのものの視点を入れて、「直接何かしてもらってなくても間接的に多くの人々によって支えられていることに気づき、感謝する気持ちが芽生えましたか。」と問うのもよい。



4 最後に

「発問の工夫」という切り口で授業を問い直すと、これから私たちが取り組まなければいけない授業改善のポイントが明確になりました。4区分された発問の分析表をもとに、児童の多面的・多角的な思考と価値観への気付きを促す、さらなる質の高い発問の工夫、また、昨年度の積み上げをもとにさらなる道徳学習プログラムのブラッシュアップや授業改善を図っていきましょう。

宮里教授の講話で、「誰のために授業をしているのか」という言葉を自分に問い直し、道徳科の主題解釈、教材解釈、児童の実態把握をしっかり行って自分のものにし、ねらいを明確にしてぶれない授業づくりを考え、子どものためにする授業づくりをしていきましょう。

ご指導いただいた、広島大学大学院教育学研究科 宮里 智恵 教授に大変感謝しております。また大変お忙しい中、授業を提供していただいたお二人の先生方に多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。